

僕が大きくなるまで

小川未明

青空文庫

しょうがつこう
 小学校にいる時分のことでした。ある朝の時間は、算術であつたが、友吉は、この日もまたおくれしてきたのであります。

「山本、そう毎日おくれてきて、どうするんだね。」と、先生は、きびしい目つきで、友吉をにらみました。そして、その時間の終わるまで、教壇のそばに立たせられたのです。ほかの生徒たちは、先生から宿題の紙をもらつたけれど、友吉一人は、もう一つことができませんでした。

鐘が鳴ると、生徒らは、先を争つて廊下から外へとかけ出しました。そのとき、良一は、先生が教員室へいかれる後を追

ったのです。

「先生、山本くんは、働いているので、遅刻したのです。」

と、いいました。

この意外な報告に、先生は、びっくりしたようすでした。

「そうか、なにをしているのだね。」

先生は、良一の顔を見られました。良一は、ついこのあいだ、友吉が新聞配達をしているのを見たことを話したのであり

ます。

「よく知らせてくれた。だが、なるだけ時間におくれないようにいつてくれたまえ。」

先生の声は、和らいで、目には、愛情がこもっていました。

た。

そんなことがあつてから、二人ふたりの少年しょうねんは、仲なかよしとなりま
した。高等科こうとうかを卒業そつぎようするころには、たがいに家庭かていの状じようた
態いも異ことなつて、良一りようは、電氣でんきに興味きようみをもつところから、その
ほうの学校がっこうへいったし、友吉ともきちは、農業のうぎようの学校がっこうへ入るこ
とになりました。

「僕ぼくも、君きみと同じ学校がっこうへいきたいのだけれど、叔父おじさんが、農の
業うぎようがいろいろというし、そうきらいでもないから、そうす

ることにしたのだよ。」と、友吉ともきちは、良一りように向むかつて、いいま
した。

「学校がっこうを出たら、大陸たいりくへいきたまえ。」

「君は。」と、友吉は、きき返しました。

「僕も、支那か満洲へいきたいんだが、お母さんが年を老つて
いるから、まだどうするか考えていないのさ。」

「三年も、四年も後のことだから。」

「あは、は、は。」

「学校が異うと、いままでのようにあわれないね。それに、僕
の家では、すこし遠くへ越すんだよ。越しても、僕、ときどき遊
びにくるから。」

「所を知らしてね。」

短いズボンをはいた、二人の少年は、いつまでも道の
所に立って、名残おしそうに話をしていました。

友吉ともきちからは、その後ごなんの便りたよもなかったのです。やがて、翌年よくねんの春はるがめぐつてきました。

ある日ひ、突然とつぜん友吉ともきちが訪ねてきました。

「小西くん、花はなを持ってきたから、植うえておかない。」と、新聞紙しんぶんに包つつんだ、草花くさばなを渡わたしました。香りかおのする青い花あおはなが、咲さきかけていました。

「きれいだね、これは、なんという花はななの。」

友吉ともきちは、外国種がいこくしゆの花はなの名をいっただけれど、良一りようは、すぐには覚えおぼえられませんでした。とにかく、後あとから鉢はちを見つみけて、植うえることにして、友吉ともきちを自分じぶんのへやへつれてきました。二人ふたりは、小学時分しょうがくじぶんの友だちともの話はなしをしたり、今度こんどの学校がっこうの話はなしをしたり

しました。良一の机の上には、電池や、真空管や、コイルや、ヒューズや、いろんなものがならんでいるのを、友吉は、物珍しそうにながめていました。

「いろいろの機械があるね。」

「僕、ラジオを組み立てようと思つて、ならべたんだよ。」

「ふうん。」

「これは、僕が造つたモーターだ。」

良一は、机のそばにあつた、手製のモーターを取り上げて見せました。電池を通せばまわるまでに、なかなかの苦心がいったのです。

「これを君が造つたの。」

「君、モーターが好きかい。」

「見ていられるだけでも、不思議な力が感じられて、好きなんだよ。」

「じゃ、君にあげよう。」

「えっ、ほんとうにもらってもいいの。」

良一は、友だちが、喜ぶ顔を見て、満足そうにうなずきました。

友吉が、自転車に乗ってきたので、良一も、自分の自転車を引き出して、二人は、散歩に出かけたのです。晩春の

やわらかな風に吹かれながら走りました。道端に、粗末な長い

建物があつて、窓が開いていると、伸び上がるようにして、良

一は通りました。うす濁ったような仕事べやに、青白い火が、

強度きやうどの熱ねつで燃もえていました。モーターの、うなる音おとがきこえま
した。たくさんの職しよつこう工はたらが、働はたらいていました。鉄てつと鉄てつの打うち合あ
う音おとが、周しゆうい囲ひびに響ひびきかえつていました。

「工こうじよう場じやうだね。」と、友吉ともきちが、過すぎてから、いいました。い
つしか、二人ふたりの自じてん転しや車はは、青あお々あおとした、麦むぎ畑ばたけの間あいだの道みちを
走はしつています。遠とおくそらの空そらが、緑みどり色いろの水みずのようみずにうるんで、そ
こには、夢ゆめのようしろくもな白しろくもい雲うが、浮ういていました。

「いい景色けしきだな。」と、良一りようが、叫さけびました。

「僕ぼくの学がっこう校がっこうへおいでよ、花はな園ぞのを見みせてあげるから。」と、友
吉ともきちが、いりようと、良一りようの目めに、先さつき刻きもらつたようさつきな、青あおい花はなや、
赤あかい花はなの、見みわたすかぎり咲さき誇ほこる、美うつくしい花はな園ぞのが映えいじたので

あります。池の畔へ出ると、若い人たちがボートをこいでいました。遅咲きの桜の花は散つて、水の上に漂つています。もうどこからか、かえるの声がしました。二人の少年は、ベンチに腰を下ろして、ぼんやりと四辺の景色に見とれていました。それから、また自転車を走らせて、きたときの道をもどるころには、空は、曇つて、村々の新緑が、いちだんと銀色に光つてかすんでいました。

ある橋のところで、二人は、左右に別れたのです。友吉は、良一からもらつたモーターの包みを高く上げて、振り返りながら走つていきました。良一は、家へ帰ると、友吉からもらつた草花を鉢に植えて、如露で水をやりました。清らかなしずくが葉

の間に伝つて、下の黒い土の中へ浸みていきます。

その夜、良一のお母さんは、頭が重いといつて、先に休まれました。良一は、いつまでも机に向かつて、勉強をしたのでした。

「お母さんに、早く樂をさせてあげたい。」

そんなことを考えながら、壁の方へ頭を向けると、山本からもらつた花が、かわいらしい影を落としていました。

山は静かで、ほととぎすが、昼間から鳴いていました。かつこ

うも、うぐいすも、鳴いていました。ふもとの高原には、紅いつつじの花が、炎の海となつて展がっていました。そこは、山に国の小さな発電所でした。良一は、ここへ勤務したのです。

「お母さん^{かあ}、こんなところで、さびしくありませんか。」

「いいえ、おまえのいるところなら、もつとさびしくたつてかわないよ。」

年老^{としと}つたお母さん^{かあ}は、にこにこしていられました。目^めがさめると、良一^{りよう}は、空想^{くうそう}したことを夢^{ゆめ}に見たのでした。

昨夜^{さくや}、頭^{あたま}が痛^{いた}むといつて、早^{はや}く床^{とこ}につかれた母親^{ははおや}は、今朝^{けさ}は早^{はや}くから、働^{はたら}いていました。

「お母さん^{かあ}、お気分^{きぶん}はいかがですか。」

「もう、よくなりました。」

良一^{りよう}は、母^{はは}の健康^{けんこう}なのが、なによりもうれしかったのです。

「お母さん^{かあ}、僕^{ぼく}が、大^{おお}きくなるまで達者^{たっしや}でいてください。来^{らい}げ

月つきから、昼間ひる間働いて、夜学やがくにいけますから。」

「そんなことをして、おまえの体からだがつづきますか。」

「だいじょうぶですとも、これ、こんなに太ふとっているでしょう。」

良一りよういちは、腕うでをまくつて見みせました。このとき、母親ははおやの目めには、

涙なみだが光ひかりました。

授業じゆぎようの休み時間やすに、廊下ろうかへ出でると、壁かべには少年工募しょうねんこうぼしゆ

集あつの工場こうじようのビラが貼はられていました。時勢じせいは、いまや少しょう

年群ねんぐんの進出しんしゆつを待ち受うけているのでした。そこには、やは

り良一りよういちと同じような境遇きようぐうの少年しょうねんが、同じ意志と希望おな いし きぼうに燃も

えて、熱心ねっしんに目めを貼はり札ふだにさらしていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「僕《ぼく》が大《おお》きくなるまで」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕が大きくなるまで

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>